



「平成17年度 酪農経営発表大会」を聴講して

(財)森永酪農振興協会主催による「平成17年度 酪農経営発表大会」が去る2月17日前橋テルサにて行われましたので報告いたします。

会場は各地から集まった約250名の聴講者で溢れ、酪農家はもとより地元の高校生らも参加し熱心に耳を傾けておりました。

関東～東北地域より選ばれた五名の酪農家による経営発表が行われました。いずれの発表者も、主に家族経営、少数精鋭の飼養スタイルではあるものの、それぞれ独自の経営理念に基づき個性を活かした健全な経営を行っております。特に興味深い点は各々の抱く「将来の目標」についてでした。増頭し大規模経営を目指す方、育種改良に力を入れていくという方、また省力化をさらに進めて『楽農』を目標にしている方などがおり、今後はより個性に富んだ経営スタイルに特化していくように感じました。

神奈川県からは茅ヶ崎市の酪農家が発表しました。命題として掲げた「都市近郊農業が目指す地域調和」に対して、評議員からの高い評価を受けておりました。住宅地化してきている地域であり、また暑熱地域でもある中で、環境、特に臭いの拡散に気を配り牛舎の換気を工夫しているとのことでした。今後は、地域環境の実情からみても規模拡大路線ではなく育種改良を進め、少数精鋭型の家族経営を目指していくそうです。この点においても、県下の酪農スタイルの注目すべきモデルになるのではないかと感じました。

発表後は「ファミリーファームとメガファームの経営形態～日本酪農とアメリカ酪農の比較から～」というテーマで瀬野豊彦先生(元日本農産工業株式会社)の講演がありました。両国の酪農形態の比較から見えてくる日本酪農の将来像についての説明が大変興味深いものでした。

アメリカでは大型化が進むにつれて、十数年前から牛の短命化と更新率の上昇、牛の育成率の低下が問題化されているとのことでした。これらは同じような状況をもつ日本においても今後の課題になると考えられています。また、経営形態別に明確に異なっている管理技術が混乱しており、特に飼料の給与技術にだけ注目が集まる傾向にあることが問題視されるとの説明がありました。酪農指導という点で大変参考になる講義でした。